1995年の夏、バルコニーから桜の樹が見える部屋を見つけ、YUKIは上京して3度目の引っ越しをした。

(うん、大丈夫。ここ、すごく気持ちいいよ)

3rdアルバムの歌詞のほとんどは、この家のリビングで書き進めることになる。

アルバムのプリプロダクションは、これまでにない時間を費やして行われ、JUDY AND MARYは8月に入ってようやくレコーディングにとりかかろうとしていた。『ORANGE SUNSHINE』ではいくつかのブロックに分けて録り進めていたが、今回は夏のイベントにも一切出演せず、7月から9月までレコーディングに充てている。

1st、2ndとも、古くからあった曲やライブで演奏したことのある曲ばかりが収録されていたのに比べ、このアルバムでは「帰れない２人」「Little Miss Highway」以外はほとんどが書き下ろしだ。

さらに新しく、さらにいいものを作らなければならない——YUKIは、そう自覚していた。

「この曲、歌いたい。あたし、すぐに詞を書くよ」

自分でそう言い出したものの、なかなか詞が書けない、というようなことが多くなったのも、このころからだ。

見かねた五十嵐が声をかける。

「YUKI、無理すんなよ」

「いや、絶対にやる。あたし、頑張って書くから」

日ましにどんよりしていく彼女に、恩田が提案する。

「YUKIちゃん、この曲は次に見送ろう」

「いや、この曲、絶対いいから。もうちょっとで出来るから」

しかし、歌入れ前日。出来ていない。もう時間がない。

「YUKI、どうなの～？ どうすんの～？」

「……うん、頑張る…………っていうか、TAKUYA、助けて！」

たとえば「ステレオ全開」は、TAKUYAのアイデアを借りながら仕上げた。「Miracle Night Diving」は、もっと悩んだ。イメージと言葉とが自分のなかでなかなか合致してくれず、最後の最後まで持ち越した。ぎりぎりに仕上がり、その勢いが歌に表れたのかどうか、ボーカル・ダビングではすぐにいいテイクが録れた。

いい曲だと思ったら、YUKIは絶対に退かない。作詞でどんな苦しみを味わったとしても、だからまた、繰り返すのである。

「この曲、歌いたい。あたし、すぐに詞を書くよ」と。

YUKIの感性を、五十嵐や恩田はバンドのひとつの羅針盤として信じているところがあった。

「YUKIの言う、”カッコイイ”とか”好き”とか”いい”には勝てない」

五十嵐はYUKIのことをよくそう言った。

男たち3人には解釈しがたい感性をYUKIは持っている。

反対に、YUKIにはなかなか理解できない視点で、TAKUYAや恩田、五十嵐がバンドの音楽を見つめていることも確かだった。

また、志向や視点に違いこそあれ、同じ背丈で感じ合えるTAKUYAの存在は、あらゆる意味でYUKIの創造力を触発した。

「ドキドキ」「Little Miss Highway」「Oh! Can Not Angel」「あなたは生きている」「アネモネの恋」——ミックスを終えたばかりの新しい歌たちを、ひとり聴いていると、YUKIはわけもなく泣けてきた。

「帰れない２人」が流れるといつも涙がこぼれた。

（せつないアルバムだなぁ。……なんか、悲しい感じの歌が多いんだね。このアルバムの歌って）

新たなリズムを取り入れ、バンド・サウンドの幅は大きく広がっていった。歌詞とメロディのブレンド感は、JUDY AND MARYのそれまでのアルバムのなかで傑出している。

当初YUKIが描いていた、「Over Drive」「ドキドキ」を核に作っていこうというイメージは、レコーディングが進むにつれ変化していった。作品一つひとつに独自の世界があり、さらには「Miracle Night Diving」といった新たな核と成り得る作品が出てきたからだ。

次々に完成していく新しい歌たちに、YUKIは確かな手応えを感じていた。同時に、これで本当に前作を超えることができるのだろうかと、つねに自問自答していた。素晴らしいアルバムを作りたいという欲求は、１年前とは比べようのないほど高まっている。

このアルバムは、YUKIが案じているその間にも、バンドを先へ先へと誘導していく力を備え始めていた。ライブ動員は増え続け、また「Over Drive」の影響でバンドを取り巻く状況は、変わりつつある。３枚目のこのアルバムが、より多くの人から真価を問われる作品になることは、YUKIにもわかっていた。

９月に入り、ミックス・ダウンも残すところ数曲と、アルバム完成まであとわずかというときのことだ。

YUKIたちは、その日のミックスの仕上がりをチェックしていた。コンソール・ルームにあるソファや椅子にそれぞれ腰かけ、耳を傾ける。そこに珍しく、マネージャーの堀江がやってきた。

彼は楽曲が仕上がるまで、あえてバンドの音をほとんど聴かない。この夏から新しくスタッフに加わった柚上直之にレコーディング現場を一任してからというもの、ほとんどスタジオに顔を出していなかった。

「マネジ、今日はどうしたの? ミーティング? 違うよね」

どっかとソファに座ると、堀江はYUKIたちにこう言った。

「よし、じゃあ武道館やるよー」

「えっ!?」

「今なんとおっしゃいました?」

「やるよ、武道館2DAYS」

「えぇ——っ!?」

「できませーん！ 絶対できないよ——！！」

「やるよ、全然やれるよ、武道館。っていうか、やるんだから。あんたら、ちゃんと演ってよ」

恩田はニヤニヤしている。喜びを隠さない。

「そうかぁ。うーん、お客さん大丈夫かなぁ、入るかなあ」

TAKUYAも意外に冷静だ。

「2DAYSはどうかね～。まぁじゃあ、イベンターのホットスタッフさんに頑張っていただいて」

五十嵐とYUKIは、猛反対。ふたりは堀江に訴えた。

「絶対無理だ、しかも2DAYSなんて絶対入らない」

「やめよう、マネジ。ホント無理だよ。やめようよ」

「いいや。絶対にやる」

かくしてアルバム『MIRACLE DIVING』は９月下旬に完成。

その数週間あと、JUDY AND MARYは早々と新たにレコーディングをしている。テレビ・アニメ『るろうに剣心』のタイアップが急遽決定し、わずか１週間で曲を上げ、詞を書いた。「そばかす」だ。

（この曲、イケてる！！）

YUKIはそう思った。

けれども、武道館のステージで初めて演奏するこの曲を、観客全員が大合唱してくれるとは、YUKIにはまだ想像もつかない。

武道館のチケットが、ほんの数時間のうちに完売になることも。